

Title	フランス社会思想史概論文献数種
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.6 (1933. 6) ,p.841(59)- 845(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19330601-0059
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最近景氣觀測に現はれたる理論と統計の折衷的傾向に就て  
る事實である。

五八 (八四〇)

ハーヴァートの方法に據れば、謂はゞ、統計は無機的な取扱を受けてゐるに對し、折衷的方法是、一定の景氣理論を基礎として、統計的操作が規定せられるからして、統計が有機的に取扱はれてゐるといへるであらふ。本文に紹介した折衷的方法も、何等かの景氣理論を基礎としてゐることに於いて大體一致してゐるとしても、これが統計の實際的操作の上に如何に作用してゐるか、換言すれば、理論を如何に應用してゐるかに就いてはそれぞれ異つてゐる。一方に於いて短期に於ける經濟的變動を生せしめる原因に就いて、其の經濟的數量を求め、これに統計操作を加へて豫測の第一過程としてあるもの(レスキュール、ジンガー、ヘネー等)あるに對し、他方に直接にはかゝる原因關係を離れて、景氣徴候を最も明瞭に表明する數量を均衡理論上から抽出し來り、これに據つて、特狀景氣型を構成せしめる一手段とするもの(ワグスマン)がある。前者に於いては變動理論が豫測論上主要なる地位を占め、後者に於ては寧ろ統計が主要なる地位に置れてゐる。而して、孰れが正鵠を得てゐるか、其の得失は如何の問題は豫測論に於ける統計應用の限界の角視せらして新しく吟味せられることを要する。唯茲に看過し得ない一事は、後者に於ては勿論前者の中にも、景氣徴候型の統計的構成を重視するの傾向が存在してゐることである。徴候型の構成は、豫測の結果に對して數量的時間的規定を要求することが大となればなるに従つて愈其の必要が増大し來ることとは明であると謂へやふ。乍併、かゝる傾向は往々にして結局ハーヴァードのその如き機械的方法への復歸を生ぜしむるに至ることは想到するに難くはない。即ちかゝる徴候型構成に拘泥する限り、生長的發展や經濟的發達と景氣變動との相互依存關係は没却せられ、變動型が固定的性質を帯びて來る結果、現在の豫測資料たる經濟的數量は、發達の要素から離れて、これ等の定型に機械的に鑄入せられる危険を有するのである。(昭和八・五・一九)

## フランス社會思想史概論文献數種

永田 清

フランス社會思想史全般に亘る著書は、獨乙に於ける獨乙文献の如く、豊富ではない。この事は、一部、概論書を好まざるフランス人の性癖にもよるのであらう。無論個々の部門に關する好著は多い。例へば、  
十八世紀フランス社會思想に關しては、

- A. Lichtenberger: Le socialisme au XVIII<sup>e</sup> siècle (Étude sur les idées socialistes dans les écrivains français du XVIII<sup>e</sup> siècle avant la révolution) 1895
- A. Espinas: La philosophie sociale du XVIII<sup>e</sup> siècle et la révolution. 1898.
- A. Lichtenberger: Le socialisme et la révolution française (Étude sur les idées socialistes en France de 1789-1796) 1899.

フィジオクラフトと其先蹤に就ては、

- G. Weulersse: Le mouvement physiocratique en France (de 1756 à 1770) 1910.
- A. Dubois: Précis de l'histoire des doctrines économiques dans leurs rapports avec les faits et avec les institutions, Tome I (續刊現れず) Époque antérieure aux physiocrates. 1903.

フランス社會思想史概論文献數種

五九 (八四一)

フランス革命とサン・ジャン運動に於ては、

J. Jaurès: Histoire socialiste de la Révolution française. 1923-24.

Advielle: Histoire de Gracchus Babeuf et du Babouvisme. 1884.

Bonarroti: Histoire de la conspiration pour l'égalité dite de Babeuf. 1869.

サンシモニスト・フウリエリスト・ブルジョアリストのつは、

H. R. d'Allemagne: Les Saint-Simoniens, 1827-37. 1930.

J. Charléty: Essai sur l'histoire du Saint-Simonisme. 2 ed., 1930.

G. Weill: Saint-Simon et son œuvre (un précurseur du socialisme) 1894.

H. Bourgin: Fourier (Contribution à l'étude du socialisme français) 1905.

P. Desjardins: P.-J. Proudhon. 1896.

A. Berthod: P.-J. Proudhon et la propriété. 1910.

十九世紀前半のフランス社会思想史とつは、

G. Isameri: Les idées socialistes en France (de 1815 à 1848), le socialisme fondé sur la fraternité et l'union des classes. 1905.

又、一八七〇年以後より現在に至る迄の経済學説史とつは、

G. Piry: Les doctrines économiques en France depuis 1870. 1925.

がある。此等の著書は各個部門の研究として看過出来ぬものと謂へるであらう。素より、一國思想の本質的研究は、

其本源的文献に依るか、少くとも、個々思想の研究文献に據らねばならぬこと無論である。併し乍ら、徒らに、何等の豫備知識なくして直に本源的資料の研究に進むことは、勞多くして收穫が少い。この意味で、思想史全般に亘る概論書の存在が必要となつて来るのである。然らば、斯る意味のフランス社会思想史概説文献には如何なるものがあるか。

其數種を擧ぐれば、

H. Michel—L'idée de l'État, Essai critique sur l'histoire des théories sociales et politiques en France depuis la révolution. 3 ed. 1898.

この書の特徴は、國家と個人主義の理念を中心として思想の發展を説く點に在る。即ちミシエルは、序論に於て、フランス革命に至る迄の十八世紀哲學者及び個人主義者の理論と運動とを述べ、續いて、一篇二篇に於て、個人主義原理に對する政治的及び社會經濟的反應を擧げた。サン・シモン及びサン・シモン主義者、ビュシエ、ピエール・ルルウ、ルイ・ブラン、ペッケエル、ヴィダル、シスモンデイ、ブランキ、ビュレエ等の思想運動は斯る反動として解釋されて居る。三篇は、十九世紀個人主義者の提題の説明であつて、デティユド・トラシー其他による十八世紀より十九世紀への個人主義の轉化、ロワイエ・コラル、ギゾーの自由主義、トックヴィル、ラマルテインの民主主義、セエ、ロッシイ、デュヌワイエ、バステアの正統派經濟學説が説かれる。茲で最も注意を惹くのは、ミシエルが、フウリエ、ブルドン主義を個人主義のパラドックスとして説明する點である。彼は謂ふ——「フウリエ、ブルドン」は個人主義を其結論と對立せしめる。併し乍ら、「フアランステエル」と「アナルシイ」は正しき意味に於て此原理の論理的適用にすぎないのである(前掲書三七五頁)と。フウリエ、ブルドンを社會主義者とするか、個人主

義者とするかには異論がある。其は結局社会主義、個人主義なる名辭の意義を如何に解釋するかによつて決せらるべきであらう。フウリエ、ブルドン共に、私有制度の無條件廢止論者ではない。従つて、私有制度の廢止を標準として前二主義を區別すれば、此二者は個人主義者中に這入るのである。ミシエルが、この二人を評して「彼等は經濟學者(正統派)及び社会主義者の開き且つ測定した角度から問題を見た」(四一六頁)と謂つて居るのは、二者理論の精細なる分析者として最も率直なる解釋であらう。四篇に於てコント其他社會學者の社會思想(コントと經濟學に就ては、Roger Mauduit, Auguste Comte et la science économique. 1929—拙稿三田學會雜誌二十四卷一號參照)が述べられ、五篇で、十九世紀末の思想状態が一つの混亂期として説明されて居る。この書が、Dubois, Advelle の前掲書及び Juglar の Crises commerciales と等しき程度に於て入手困難なのは遺憾である。

C. Brouihet—Le conflit des doctrines dans l'économie politique contemporaine. 1910.

此書はミシエルの前掲書に比較すると説明の内容も稍、粗雑であるが、二十世紀初頭に於けるサンディカリズム及び労働組合の經濟理論にまで及んで居ることは便宜である。フランスに於ては、其思想史を述べる場合、自由主義學派、社会主義學派、中間學派に分つて、各、其發展の過程を説明するのが普通である。例へば、前述のピルウの如きも其れであり、ベシヨウも亦、二十世紀の經濟學派を分つて、フランス經濟學派、個人主義學派及び國家社會主義、社会主義學派として居る。ブルイエもこれに類する。

即ち彼れは一篇に於て自由主義學派を論じ、フイジオクラフト及び其自然的秩序の理論と其後の發展を述べて居る。二篇では、中間學派として、干渉主義及びソリダリテ學派と社會的急進主義が問題とされる。三篇に於て、社會主義を論ずるが、この場合、社会主義者の理論を三個に分つて、(一)宗教若しくは期待社會主義 (Le socialisme

messianiste ou expectif)、(二)暴力社會主義、(三)法的社會主義として居る。(二)がサンディカリズムと結び付くことは無論であるが、フランス社会思想史としては、サンディカリズム自體の説明に相當の紙數を費す必要がある。故に彼れは、特に一篇を設けて、サンディカリズム及び労働組合の經濟理論を説いた。

この書の特徴は、思想の發展を多く説かずして著者自身の立場よりする經濟理論的批判に努力して居る點である。思想史全體を展望せんとするものにとつては、其は却つて大なる障礙であらう。

C. Bouglé—Socialisme français, 1932.

ブグレの近著「フランス社会主義」は、其主題が社会主義史のみに限らるゝだけに、叙述の態様も整然たるものがある。十九世紀前半はフランス社会思想史上最も收穫の多かつた時代である。サン・シモン、フウリエ、續いてブルドンの出現は、殊に此等改革者(Reybaud)の基本理論が各、異なるだけに、研究の興味を惹くことが甚しい。ブグレの該書はこの點に關して教ふところ極めて大である。即ちサン・シモニアンと産業主義、フウリエリズムと消費組合運動、ブルドンとサンディカリズムと謂ふ連繫はブグレに依て可成り明瞭に描出されて居る。即ち彼れは、十八世紀の哲學者及び「經濟學者」並にフランス大革命の遺産を調べた後、サン・シモニズム、フウリエリズム及びブルドニズムに就き、其發生當時と現在との比較による決算書を作成した。思想史上の收穫を現實の理論と運動とに結び付ける試みは、この書に於て、充分の成功を収めて居るのである。